

## 何のために学び、生きるか

大和祐玖

### ●研修にあたり

「貴重な体験がしたい。」Oxbridge 研修への参加動機はそれだった。『貴重な体験』とは、世界トップレベルの大学で、その大学生と交流を持ち、かつそれが高校時代にできることだ（しかも個人的に旅行するより旅費は安い）。この研修がなかったらこんなチャンスは一生ないだろう。自分が研修に参加して、何を学べるかはっきりとは研修前には分からなかったけれど、自分がイギリスにいるという想像をするのも難しかったし、だからこそ挑戦してみようとも思った。

### ●研修にて

#### 《広大》

とにかく博物館が広かった。大英博物館も、Oxford 大学付属の博物館も、今まで見たことない広さだった。これが『一日では回れない』というものかと、驚嘆するばかりであった。世界はやはり広いのだと感じた。

また、イギリスには様々な国から人が集まっており、顔立ちから肌の色、服装まで、多種多様であった。このことから世界の広さを感じ、国同士の文化の違いというものを意識させられた。

世界が広いからこそ日本という国の存在も意識した。日本車が多く走っていたり、日本の料理を出すような店をいくつか見かけたりした。店での対応やモノの品質などから、「日本での常識」は世界では全く通用しないことも実感した。

#### 《努力》

研修中、Oxford 生やレクチャーをしてくださった方々の話を聞いていると、皆が似たようなことを話すことに気付く。普通のことを言うのである。この言い方だと語弊があるかもしれない。つまり彼らは当たり前のように努力を重ねていて、当たり前のように向上心を持っていた。一日一日を大切に、自分がやりたいことをひたすらにやっていた。こういったことはなかなか難しい。「普通に普通ができる」ことが格好いいと思ったし、自分がどれだけ当たり前のことができていないかを痛感した。

#### 《英語》

イギリスでは歩行者信号が青である時間が日本に比べ短い。2秒しかないなんてものもあった。私はそのことを Oxford 生に伝えようとするも、“Sorry?”と聞き返されるばかり。自分から話しかけたのはこれが初めてであり、覚悟はしていたがやはりショックもあった。

意思疎通が唯一できる言語として実際に話す中で気付いたことも多い。まずスピードが違う。Oxford 生はゆっくり話してくれたのだが、それでも研修の初めのころは聞き取れないことが多かった。単語として聞き取れても、それを文として理解するには時間を要した。語彙力の必要性も感じた。基本的には簡単な言葉を使ってくれたと思われるが、単語の意味が分からないと会話も進まない。サイエンスフェスティバルでは物理用語の和訳・英訳に苦戦した。「単語帳に出てきたあの単語だ!」「あの慣用表現だ!」

と思ったときは、ちょっと嬉しかった。つまりは私たちの行っている勉強でカバーできることは少なくないということだ。学校での英語の勉強も無駄ではない、そう感じた。

### 《学び》

「何のために学ぶのか。」

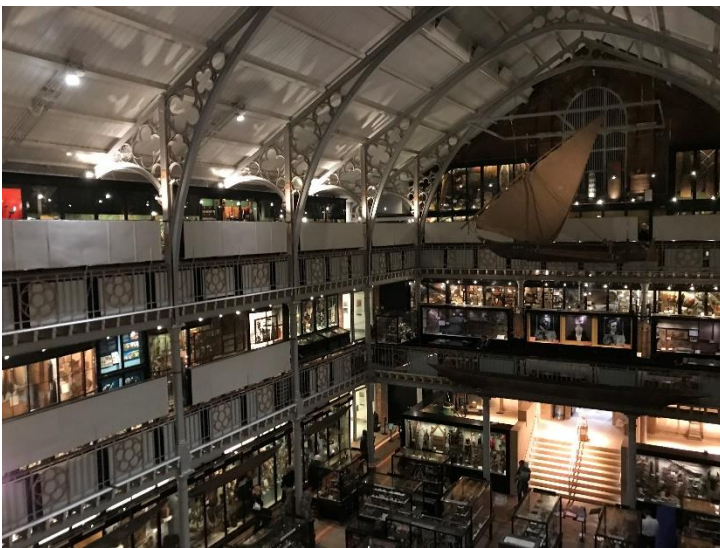
Oxford 生は“自分のため”、“将来のため”に自ら勉学に取り組んでいた。対して私たちはどうか。“大学に合格するため”なんていう不純な理由ではないだろうか。勉強できることが当たり前となっている昨今、私たちはしっかりと考える必要があるだろう。

### ●研修を終えて

ビッグ・ベンが 150 年に一度の改修工事をしていた。私は初めそれを残念だと感じたが、それを幸運とみるか不幸とみるかは見方によるのでないか。結局重要なのは体験ではなく、体験に対してどう思ったかということなのだ。

自分の小ささと未熟さをひたすらに感じた。紅林さんが「私は、自分が自分に甘いを知っているから、選択をするとき辛い方を選ぶのだ」と仰っていたが、私は楽な方へと流されているだけだ。夜の授業でうとうとしたり、日記をつけるのを後回しにしたりしたことは、疲れていたからといって認められることではない。研修中だけでない。日常生活でもこういった例は数えきれないほどある。この研修で私は多くの人の「生き様」をみたわけだが、それは私自身の「生き様」が如何なるものかを客観視させることとなった。

最後に、研修に関わった全ての方への感謝を述べて、研修報告とさせていただく。



(左) Museum Of Natural History / (右) 改修工事中のエリザベスタ(通称：ビッグ・ベン)